

注) 本論文は、千葉市立院内小学校教諭(当時:言語治療教室担当)の白川信夫氏が、長期研修の修了論文として、院内小で行われていた“吃音児の母親教室(担当:梅村)”の実践をまとめたものである。

吃音児の母親指導

—— T・K児の母親指導 ——

I 主題設定の理由

VarRiperは「吃りの人を手助けしようと思えば、自分が何をしているのかということと、なぜそれをするのかということをよく理解していなければならない」と述べている。⁽¹⁾ 1年間の現場実践を通して痛感したことは、まさにこのことであった。親と子を目の前にして、私は何をしているのか、なぜそれをしようとしているのか明確にされないまま右往左往しつづけてきたと言える。それだけに上に引用したことばは、突き刺さるものであった。このようなことから、理論的な基礎を自分なりに身につけたいと思った。

ところで、アリストテレスの時代から問題とされてきたと言われる吃りの問題は、今なお謎と言われている。原因や治療などについてもさまざまな考え方があり、また全体を見渡すことが困難なほどでもあり、また論議も決着がつきそうにもない。⁽²⁾ しかし近年になって吃音は学習されたものであるという考え方に多くの一致を見るようになってきたようである。学習されたものと言ってもいくつかの立場があるわけであるが、それらの中の一つに Mowrer, O, Hの学習二因説にもとづいた Brutter, E, Jと Shoemaker, D, Jの治療理論がある。⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾ 最近この理論にもとづいたアプローチが主に二次性吃音の場合に用いられ効果をあげているか、一次性または移行期の吃音治療の報告は少ないようである。

そこで、一次性または移行期の吃音の治療指導を Brutterと Shoemakerの理論にもとづいて実施してみたいと思ったわけであるが、本研究では特に、この理論から母親指導欠どのように位置づけられるのかを考察したいと考えた。またその母親指導の考え方にもとづ

いて吃音児の母親指導を実施してみたいと考えた。これらのことを通して、今後現場での実践に役立てたいと思いこの主題を設定した。

II 研究の目的

- 1 Brutterと Shoemakerの理論から母親指導の位置づけをする。
- 2 1にもとづいた母親指導の事例を考察する。

III 研究方法

- 1 母親指導の位置づけのための文献研究をする。
- 2 一次性または移行期の吃音児の母親指導を、院内小学校において実施する。事例については、下記のようにする。

- (1)対象児を選定し必要な情報収集をする。
- (2)基礎資料をもとに、方針、計画をたてる。
- (3)母親指導を実施する。
- (4)指導の経過を記録、整理し、指導の効果を考察する。

IV 研究内容

1 文献研究

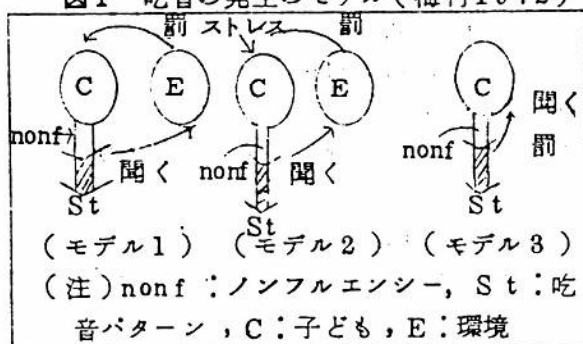
(1) 吃音の考え方

Mowrerの学習二因説にもとづく Brutterと Shoemakerの考え方によると、吃音の発生と発達を古典的条件づけと道具的条件づけで説明し、治療はそれぞれの条件づけの消去の過程であるとしている。つまり話すたびに注意や言いなおし、叱責など、不安を引き起こさせるような罰刺激が周囲から与えられることによって、もともと中性である話す場面が不安と結びついてくるようになる(古典的条件づけ)。この話すことと不安の結びつきが強くなってくると次には話す場面になると不安が生じ、実際に罰刺激が与えられなくて

もその不安がきっかけとなって話すこと避けたりする行動がつけられてくるようになる。そしてその行動は避けることによってますます強められていく(道具的条件づけ)。

以上の考え方もとづいて吃音の発生を図式化すると次のようになる。

図1 吃音の発生のモデル(梅村1972)



モデル1は、ことばの正常発達の上でみられる非流暢さに対して、周囲の人から注意や言いなおし、不快な表情や叱責などの罰が与えられることにより吃りの発生となっていく場合である。

モデル2は、非常にこわいときやびっくりしたとき、緊張した場面で無理に話させられるときなど、ストレスのある状態で非流暢さが目立ち、それに対して周囲の人から罰が与えられた場合である。

モデル3は、特に周囲の人から罰が与えられないが、自分自身でことばの乱れに気づき話すことと不安が結びついて吃りが発生していく場合である。

次に吃音の発達について概略述べる。

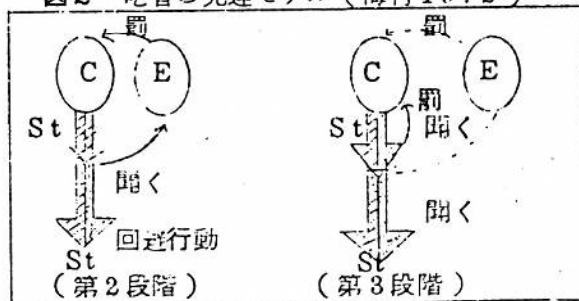
第1段階: 吃音の発生のモデルにみられるように、主に周囲の人が聞いて罰が与えられて吃っている段階で、話すことと不安の結びつきはあるものの、自分の話し方を自覚したり気にするという事はほとんどない。吃りながらよく話すという状態である。

第2段階: 周囲の人が聞いて罰が与えられて吃るといふ循環が主であるが、自分自身も何かおかしいとかききをもつようになる段階である。吃ると罰を受け不安になり、ますます

吃って罰が多くなり不安がより強くなっていく。第1段階が進行し、吃る頻度が多くなるばかりでなく吃音パターンも引き伸ばしやつまるといふように変化してくる。時にはブロックなどの随伴がでてきたりする。周囲の罰を与える人も、第1段階では家族などを中心にしたものが、幼稚園や学校へと広がっていく。

第3段階: 自分で自分の話し方を監視して、自分自身が罰を与えるようになる。そして周囲の影響を受けることが弱まってくるようになる。この段階ではなるべく目立たなくさせる工夫をするようになり、さまざまな随伴がみられるようになる。また話す場面を意識的に避けたりする行動が出てくる。これらの行動は不安を一時的に少なくすることによってさらに強められる。そしてますます不安が強まり、悪循環のうずにはまりこんでいく。

図2 吃音の発達モデル(梅村1972)



(2) 治療の考え方

吃音が発生において、話すことと不安の結びつき(古典的条件づけ)であり、その発達においては、不安の増大と不安を回避するという行動を身につけていく(道具的条件づけ)ことの二つの過程と考えられるならば、治療ということは、話すことと不安の結びつきを切ることであり、回避する行動をとりさっていくことである(消去)。

第1段階: 主として周囲からの罰やストレスで吃りが維持されているのであるから、罰やストレスを与えないような環境の調整が必要である。また子ども自身には、話しても不安ではない経験を多くつませることによって、

話すことと不安の結びつきを切る。またストレスに対しての耐性を強めていくことにより環境からの影響を受けにくい子どもにしていく。

第2段階：この段階では第1段階と同様、環境調整と子ども自身への働きかけが主となるが、同時に吃音パターンへの働きかけも必要になってくる。例えば遊びの中でのごことば遊びとか、本を読んでみたりすることによって、子どもには訓練を受けている感じを持たないで楽しく練習する。

第3段階：環境に問題があっても受けとめる子どもにはそれ程決定的な影響をもたなくなり、話すことと不安の結びつきは自分自身の中で維持、強化されるので、子ども自身への直接的働きかけが主となる。つまり不安そのものを消していくことと、回避行動と習慣化された吃音パターンを少なくしていくことである。

(3) 母親指導の位置づけ

第1、2段階にある吃音の維持、悪化は主として環境からの罰とストレス及び子ども自身の耐性の弱さであることを述べてきた。この環境からの罰とストレスを与える人は、子どもによってさまざまであるが、一般的には母親が占める割合は大きいようである。治療指導していくためには、罰とストレスを与える人がそうでないようになることが必要である。このことから母親への指導が重要になるわけであるが、時には母親以外の方が主たる罰やストレスを与えている場合、母親を通して働きかけなければならないこともある。また子どもの耐性を高めていくためにも影響力の大きい母親の働きかけが重要となる。

以上のように母親の指導が考えられるわけであるが、その目的と内容をまとめると次のようになる。

ア 話すことと不安の結びつきを切れるようにするための指導・・・吃音についての正しい知識を得させ、話すこと(吃る)に罰

を与えない。子どもの話をよく聞いてやり子どもが話をすることが楽しいという相手になれるようになる。吃りが恥しいとかみっともない、心配であるという気持ちが捨てられるようになる。etc

イ 吃りの誘発の防止ができるようにするための指導・・・口数や手数を少なくしたり、過大な要求や期待をしないようにして、ストレスを与えないようになる。

ウ 子どもの罰やストレスに対して耐性を高めさせていくことができるような指導・・・子どもの行動に対して積極的にほめたり、認めて、自信や成功感を育てられるようになる。未経験、未学習のことを補ない、さまざまなストレスに対してがまんができる子にさせる。自己表現できる子にさせる。etc

以上の目的と内容を達成していくために、次のような方法と形態が考えられる。

ア カウンセリング・・・親が冷静に問題に取り組んでいけるように、親の不安、あせり、悩みなどを軽減させていく。個別、集団での話し合い。

イ ガイダンス、助言・・・吃音の発生や発達などの基礎的情報を提供する。話すことと不安の結びつきを切るために、また吃音の維持、悪化を防ぐために、親がどのような行動をとったらよいのかということについて、ヒントや指示を与えたりする。

ウ 読書、テレビ視聴など・・・母親むけに費かれている図書の紹介や、NHKことばの治療教室などを視聴することによって、吃音についての正しい知識、扱い方の理解を促進する。

エ 行動リハーサル・・・応の知識を持っているが実際の行動がとれない場合など、役割演技などで行動がとれるように練習する。

オ 母親ノートの記録・・・母親の実行したことと子どもの変化、その時々感じたこ

となどを記録させ、助言やヒントを与える。
以上、吃音の考え方、治療の考え方及び母親指導の位置づけについて考察してきた。この考え方にもとづいた治療指導中の事例を次に報告する。

2 事例

(1) 対象児について

T・K 男 昭和43年8月10日生

初診 昭和48年5月

ア 主訴 吃る。特に急いだり興奮したときは、はじめのことばが出ない。幼稚園の中でことばがうまく出来ないと、友たちからかわれるのではないかと心配。

イ 生育歴

○周産期：妊娠4カ月にインフルエンザにかかったが、出産は順調。3.100g

○乳幼児期：特に大病もなく順調に育ったが、風邪をひきやすかった。

○ことばの発達：順調であった。

ウ 吃歴

○発吃前：どちらかと言えばおしゃべりではなかった。

○発吃：4才の誕生頃。発見者は母親。旧家をとりにこわして新築工事の始まった頃、部屋で3～4人でぶどう酒を飲んでいた時で、ことばの最初を2～3回くり返していた。それに対して母親は「ゆっくり言ってごらん」「もう一度言ってごらん」などと注意をした。

○経過：2カ月位いたってもいっこうになおらず、家族の者も「ゆっくり話してごらん」「最初のことばに力を入れてごらん」などと注意を与えた。5～6カ月後にはますますひどくなり、毎日のように注意を与えた。歌をうたえばと思い、毎日童謡レコードをきいて歌った。自信をつけさせるために近所の店にお使いにやるようにした。その後(1月)ことばの教室に電話で相談、注意しない方がよいと言われ注意することをやめた。この

頃が吃るのが最もひどく、母親は「お先真暗」な気持だった。8カ月後の頃は以前よりよくなってきたが、まだ最初のことばをくり返えていた。

エ 家族 社会歴

○父(33)銀行員、母(30)、本児妹(2)、曾祖母(80)、祖母(53)、叔母(28)

○身体が弱く風邪をひきやすかったこと、交通事故や公園では大きな子が野球をしていて危険であったことなどから、あまり外に出して遊ばせなかった。

○4才の誕生前後、オハシと鉛筆の持ち方がおかしく、入園前であることから毎日注意していた。

○幼稚園に入園した頃は友たちと遊ばなくて、隅で他の子のすることを1人で見ていた。さそわれるとはねのけていた。

オ 初診時の子どもの状態

○ことばの面：話しはじめてよくつまったりくり返す。ややのどに力が入る。話の途中で息を吸いながら話すことが時々ある。吃の頻度としてはかなりあり目立つ。本人もやや意識している様子。構音にラ行→ダ行、サ行→シャ行の置換がみられた。

○知的な面：会話のやりとり、絵をみての話の内容などから、特に問題はないようにみえた。

○行動面：社会成熟度診断検査ではS、A 4：0、S、Q 84で中の下。特にからたのこなし3：5、集団への参加3：7、基本的習慣の着衣、睡眠がCで、発達のアンバランスがみられた。

カ 所見

発吃が4才の誕生頃で発見がぶどう酒を飲んでいたときであったと母親は言うが、子どもの言語の正常発達から、非流暢さの目立つ時期であること、幼稚園入園前ということで黙の面の注意がかなりなされてい

てストレスがかなりあったこと、子ども自身生育歴上、からだが弱かったことや親の過保護的扱いによって外で同年令の子どもと遊ぶ経験が不足し、外からの圧力に慣れてなく影響を受けやすいことなどが背景にあるように思える。つまり話すことと不安の結びつきをたやすくさせる条件が発吃的頃に重なりあっていて、たまたまぶどの酒を飲んだことが、母親の発見のきっかけになったものと思われる。

発吃後、母親は心配しつつもそのうちなおるかもしれないと思っていたが、ますます目立つので毎日のように注意を与えてきた。いっこうによくならず、心配は更につのり、力を入れて話させてみたり、歌をうたわせるなどもしてみたが効果はなく、結果として、子どもの話すことと不安の結びつきを強めてきたようである。ことばの教室へ電話で相談してから後、ことばへの注意をやめるようになったが、母親の不安な感情があること、子ども自身外からの圧力を受けて不安定になりやすいなど、話すことと不安の結びつきをたやすくする条件があることから、この結びつきを十分に断ち切れないまま現在に至っているようである。

現在のことばの状態は難発性でどの力を入れたり、息を吸いながら話すことがときどきみられること、子ども自身やや意識しているようなことから、第1段階から第2段階にさしかかる状態にあると思える。

(2) 指導方針と計画

ア 話すことと不安の結びつきを切ること

母親は現在ことばへの注意をしていないが、今後も継続してもらおう。母親の恥しい、不安だという感情表現もことばへの注意と同じ罰刺激になり得るので、不安感情を軽減させていく。また楽しいふんいきで親子が話す機会を多くする。

イ 非流暢な話し方を増したり、吃ることを誘発させるようなストレスをなくして

いく：躰などで過大な要求や期待をしたり、逆に子どもが出来ることをあまり手伝ったりしない。口数や手数を少なくしていく。また子どもが圧力と感しないような接し方、躰の仕方をする。

ウ 子どもに圧力に対しての耐性をつけてゆく：遊びの経験を拡大してゆくことにより 同年令の子どもと遊べるようにする。母親と一緒に外で遊ぶようにし、たまたま子どもだけで外で遊ぶことがあったら、積極的にほめてあげる。

以上のことを実施していくために、月2回の集団の母親指導(母親教室)に参加してもらおう。ここでは親同志の話し合い、ガイドダンス、助言、読書、役割演技、実際に母と子が遊ぶなどの方法をとる。個別面接として約3カ月に1回の割合で行ない、集団指導で不足した助言及び子どもの様子を見ることにする。また母親ノートを記録してもらい、母親の実行したこと、その時々感じたことなどを書いてもらい、助言を与えていく。

集団の母親の指導の形態を主にとったことは、母親の悩みが1人のものではないことを通じての不安の軽減、実際の練習の場として役割演技をしていくための有利さ、親同志が問題解決のアイディアを出し合える、数名の母親を同時に指導できるという時間的効率さからである。

なお集団での母親指導の構成は、4~5才の幼児の吃りの子をもつ母親6名で、第1段階が2名、第1段階から第2段階への移行期が4名。共通の問題点は吃りについての基礎知識がなく、不安感が強い。個別の問題点では男の子と遊べない1名、同年令の子と対人関係がとれない2名、自主的に身のまわりのことができない3名、がまんができない4名である。

(3) 指導経過

集団指導は昭和48年6月30日から1

2月21日までの期間で合計13回もった。ただし11月16日、18日、12月21日は欠席し、10回の参加であった。個別面接指導は初診の他、7月18日、10月30日、12月26日の3回であった。約6か月の指導の経過をまとめるにあたり、指導方針の3つの観点(㉑:話すことと不

安の結びつきを切る、㉒:ストレスを少なくしていく、㉓:耐性をつけていくために同年令の男の子と遊べるようにすること、集団母親指導での話し合いの内容と教師のガイダンスや助言をa、母親の実行したことb、母親のみた子どもの様子と気持c、所見をdとして整理した。資料として母親の発言、ノートを利用した。

a 話し合いと助言	b 母親の実行	c 子どもの様子と母親の気持	d 所見
6/30<発吃から現在までの心境> ㉑悩みを話し合っ気持がおちねくことは子どもにとってよい。 ㉒不安な表情も罰と同じ効果、意識しすぎは逆効果だが。		㉑今なおるかどりか一番気になる。 ㉒一時はよくなったがまたどもる。特にア行、ナ行。 ㉓表情について考えたことがなかった。 ㉔本人もどもることを気づいでる。	㉑ことばへの注意をしないことはつづけているようだが不安が強くとばの面を気にしている。基礎知識が必要である。
7/18<吃りの発生と発達> ㉑吃ることは話し方だけでなく不安も結びついたもので、つまって目立たないのは悪化、 ㉒㉓同年令の子ども同志遊ぶことは、ことばや耐性にもよい。		㉑その後変化がない。ア行がつかまる。 ㉒サ行音がシャ行音になる。 ㉓オタフクカゼで体の調子が悪く遊ぶことが少なくなる。	㉑発音の異常に気づいた(5月の初診の頃は気づいてなかった)が、ことばの面だけにとらわれないようにすること。
7/18㉑経験を多くさせたリ、外で遊ばせた方がよいこと、外で遊んだら帰るように。	㉑最近子どもと遊ぶようになった。		
7/24<吃りと性格、吃っても平気な子に> ㉑性格はつくられたもので親の扱い方次第。経験のない子に5才だから急に遊べといっても無理。	㉑すもりを親子でやったりする。 ㉒友だちと遊ばせるようにしている。他の子に家に来てもらったりしている。	㉑外に出そうと思ってもあまり行きたがらないが、外で遊ばせるようになったら性格がかわってきた。 ㉒ことばの方は変りないが、くり返しが目立つようになる。	㉑子どもへの働きかけがみられる。遊ばせるのではなく、親が同レベルで遊ぶようになると思ふ。
8/30<親が吃ること慣れること> ㉑吃り方で一方一憂す	㉑親子で一緒にテレビで野球をみていたら関心をもつ	㉑ことばは相変らず。 ㉒綴えてみたら最高9回、軽く鼻うたでも歌っているようだった。	㉑次第に吃ることを心身の関連でみられるよう

<p>るのではなく、どんな時でも安心して子どもが扱えることが大事。あわてると悪化することがある。</p>	<p>たので、親子で野球をするようにしている。</p>	<p>「ああ、どもっているな」ぐらいでかわいそうな気持はしない。幼稚園が始まって心身共に疲れているのではないか</p>	<p>になってきた。 ⑦親の働きかけが増えてきた。更に実行していくようにする。</p>
<p>9/21<<母親教室に期待するものと今後の進め方の打合わせ>> ※全員が子どもの指導をしてほしいとの希望</p>		<p>⑥外で遊んだ方がよいと子どもに言うのだがなかなかきかない。先生から言ってほしい。1対1なら子ども同志遊べるが多ぜいになるとだめ。</p>	<p>⑦子どもを遊ばせる働きかけはみられるが口だけで言うことが先行。親自から外で遊ぶようにしたい。</p>
<p>10/5<<子どもとの遊び方>>⑦ことばへの注意をよくした人が一緒に遊べるようになる。テレビを子どもと一緒にみながら話し合う等。 ⑧母親がリードするのではなく、子どもの言いなりになるぐらいのレベルで一緒に遊ぶようになるとうい。</p>	<p>⑦食事の時、話題をつくってあげて話している。 ⑧夕食後、野球ごっこ、すもう、なぞなぞ、本を読んでもあげて話をしている。 ⑨テレビ番組表に印をつけて、カメンライダーと一緒に見始めている。</p>	<p>⑦ことばは相変わらずくり返すが体の調子が悪くなるとひどくなる。 ⑧家の中での遊びが多いが、近所の子とだいぶ遊ぶようになった。今まで遊ばなかった子ども遊ぶ。 ⑨テレビの怪獣ものなどが好きでなく、カメンライダーなど知らない。他の子と一緒に歌ったり、ごっこ遊びができない。</p>	<p>⑦いろいろ母親なりに工夫して一緒に子どもと遊ぶ努力がみられる。テレビを見て話をするだけでなく、ごっこ遊びが母子でできるようにさせたい。</p>
<p>10/19<<テキスト：どもりの始まりとお母さん>>⑦①どんな子も話しにくい条件では変な話し方をする。この条件をへらしていくことが大事</p>	<p>⑦ライダーキックといって子どもに私(母)が足をかいたりしてふざけることがある。</p>	<p>⑦⑧この頃ことばの調子がよいし、積極性もでてきた。幼稚園に1番に行くと行って早く出ていく。すべり台も自分からやる。自分の子に自信がもてるようになってきた。健康が大切だと思ふようになった。</p>	<p>⑦親の働きかけに伴い子どもの変化がみられてきたようだ。次第に同年令の子と遊べるようにしていきたい。</p>
<p>10/30<<個別面接>> 母親：⑦これからまた悪くなったらどうするか問に対して、一番悪い状態を経験して、今のようになってきたから、必ずまたよくなると思う。あまり心配していないとのこと。 ⑧他の子を見て、よく話す子はお母さんもよく話すことに気づき、それから母親教室や近所、幼稚園などで自ら話すように努めている。 ⑨同年令の男の子と遊べるよう母親自身が一緒にテレビを見たり、カメンライダーのまねをして対等に遊ぶようにし</p>		<p><<所見と今後の見通し>> 母親の実行により子どもの変化がみられる。⑦の罰を与えないという事は、90%以上目的が達せられている。⑧のストレスを与えない点もかなりよくなっている。 ⑨親の働きかけで次第に男の子が見るテレビを見、ごっこ遊びをするようになってきた。これからの</p>	

ている。叔母からおかしいと言われるが気にしていない。私が変ったら子どもも変ってきた。家の中なら男の子と遊ぶ。今まで4才の年下の子に追従、まねをしていたが、最近は「おまえ4つだろ、ボクは5つだから言うとおりにしな」と言うようになった。幼稚園では女の子との遊びが多いが仲間に入るようになった。また、当番でお話することが好きになった。他の子が当番をいやがると「どうしていやなんだろうね、ボク好きなのに」と言う。

子供：(行動観察)㊦遊びの中で話しかけるとよく話す。

ことばの面では軽い連発(2~3回)が主で頻度は少ない。緊張はなく楽に吃っている。軽く息を吸いながら話すことがごくたまにみられるが、初診時よりかなり減少。

㊧積木をしているとき、教師の積木をライダーキックと言ってふざけてくずす。ゲームを自分でつくってリードする。

目標として㊦㊧については母親が実生活で自然に出来るようにしてゆく。㊨については、家の中から外に出ても同年令の男の子と対等に遊べるようにしてゆく。そのために、母親と一緒に外へ出てなるべく活動的な遊びをする。また子どもが自ら外で遊ぶことがあったら積極的にほめて、行動を強化していくようにする。

11/2<<テキスト：どもりの悪化とお母さん>>㊦㊨話すことと不安に結びつきを切ること、予防のために話すことが好きとか自信のある子にしていくこと。

㊦現在ことばが出てくるまで待ってやっている。
㊨お店屋さんごっこの相手をしたりテレビを一緒にみたりしてきている。外で遊ばせるようにしている。

㊦ことばの方はまたちょっと悪いがぜんぜん気にしていない。
㊨仮面ライダーを覚え、ライダーキックをやるようになってきた。
㊨友だちの家で仲間に入れてくれないと帰って来たが「もう一度行ってらっしゃい」と言うともた外で遊ばせて行った。再び「どうしても入れてくれなかった」と言って別の男の子を連れて帰ってきた。

㊦吃っていても気にならなくなったことは、罰を与えないという目標をほぼ達成したと言える。
㊨家の中で男の子と遊ぶことを人数の拡大と屋外にもっていく。

11/7 <<母と子の遊び……母子関係観察、子どもの集団遊びの観察>>

○母親：一緒になって遊ぼうと輪投げを始める。つられて子どもが遊ぶような様子であった。
○子ども：遊びへの参加は最後。積木での集団遊びはほとんどみられず。他の子のしていることを見て同じことをする。S君のペースにのって、たまにライダーキックをしたりする。動きは活発、遊びは楽しそう。おしゃべりもよくする。息を吸いながら話すことはほとんどみられず。

12/7<<テキスト：口数や手数少ないお母さんに…>>㊦同じことを言うのにも、口やかましい仕方とそうでない仕方があり、子どもは口やかましく言われるといやな気持ちになってしまう(11/16の役割演技での母親たちの感想)

㊦以前は母親のわくの中に子どもを入れていた。～しなさいと口数が多かったが最近ソフトな言い方をするようにしている。
㊨親子で仮面ライダーごっこをしている。

㊦以前は私と話すときが一番子どもだったが、最近落着いて話すようになった。
㊦子どもはソフトな言い方で言うとかちんとこないようで、時計を見ながら自ら幼稚園へ行く仕度などをするようにになった。
㊦㊧この頃待つということを知った。病氣も時間がたたないといくら薬を飲んででもだめで、自然を待つのが一番。ことばも一日や二日

㊦吃ることに一喜一憂しないでおちついて対処できてきたようである。
㊦ストレスを与えない接し方をつかんできたことは目標にほぼ近づいたと言えると思う。

<p>⑦耐性がないとストレスを受けて不安定になり、吃りが維持悪化することがある。</p> <p>⑧一緒に外に言ってブランコとか鉄棒をお母さんがやりだすようにしたら。(個人的助言)</p>	<p>でよくなるというものではないから、ゆっくりと子どもに応じて自然にさわらわないうことぞと思う。</p> <p>①この頃、自分にあわてないようになってきたように思う。</p> <p>⑨子どもにこれからたくましさを得たい。</p>	<p>⑩外でより身体を使う遊びが活発になっていくようにすることが次の目標となる。</p>
---	---	--

(注) 集団指導でのテキストとして、大熊喜代松著「どもりの子の母親教室」を使用した。

V 結果と考察

○指導中であるが約6カ月の母親指導の結果として12月26日の面接を報告する。

母親親について；

⑦最近吃らなくなった。話し方が流暢でないが前よりも流暢になったと思う。

⑧現在子どもが見ているテレビ番組は、パピル2世、仮面ライダー、マイクロイド5、ウルトラマン、レッドマン、マジンガーZ、ガッチャマン、8時だよ全員集合、新八犬伝等で、前はほとんど見ていなかった。母親自身が知らなくてはと思って一緒に見るようにしてきた。

①⑨近所に遊びに無理につれていくが、結局帰って来ることが多い。子どもかいやなことをされるので悪い感じが残ったらどうしようかと迷う。だから子どもが好きないようにやっていたらよいのではないか。友だちがいなくても不自由ないようで、かえってわずらわしくないようだ。自然に自分から友だちと遊ぶようになるのではないか。

⑩もっと元気で思ったことを言えるように。

子どもの状態(行動観察から)；

教師との会話場面でよく話す。ときたま軽い連発があるぐらいで、頻度としてはごくわずかで初診と比較し減少した。ノドに力を入れることはなく息を吸いながら話すこともほとんどみられない。遊び(しりとり遊び)の中ではほとんど吃らない。

○母親指導の位置づけをもとに三つの指導方針をたてて指導してきた。第一は話すことと

不安の結びつきを切るために罰刺激を与えない(⑦)ことであり、第二は非流暢性や吃ることを誘発させるようなストレスをなくしていく(①)ことであった。第三は子どもに耐性をつけるために男の子と遊べるようにする(⑨)ことであった。

①⑨については、母親は指導経過にみられるように実行し、ほぼその目標は達成したと思われる。⑩については家の中での遊びでは男の子と遊べるういうふうな、次第に遊べる範囲は広がりつつある。その結果子どもの吃るという問題は現時点ではかなり改善されてきたと思われる。このことはBurtten と Shoemaker の理論から位置づけてみた母親指導の考え方は、この事例において有効であったように思われる。

○今後の課題として、⑩耐性をつけてゆくため男の子同志で遊ぶという点で、まだ改善していかなければならないし、母親自身に⑩とストレスを与えない①の関連でやや混乱がある。このことは「外で遊ぶ」ことだけが先行してしまい、子どもに不快感を与えたようである。自然に友だちと遊ぶことができるようになるだろうと言いつつももっと元気で思ったことを言えるようにと考えている。今後母親に①⑨の関連を明らかにするための助言と、無理に外へ連れだすのではなく母親自ら外に出て遊ぶことが楽しいという行動をとっていくこと、また、子どもが外に遊びに行くようなことがあ

ったら確実にほめて強化することを実行するように助言していくことで改善されてゆくとされる。この助言の場合、不快なく外と一緒に遊びに行くことを役割演技などを通しての練習をしたり、子どもの行動の強化のプログラムをたてことなどが考えられる。

VI 要 約

本研究においては、BruttenとShoemakerの吃音の治療理論をもとに、母親指導の位置づけを次のようにした。第1に話すことと不安の結びつきを切る指導、第2に吃りの誘発防止のためストレスを与えない指導、番3としてストレスに対する耐性を高めさせる指導である。この母親指導の位置づけにもとづき、第1段階から第2段階の移行期の状態にあるT・K児の治療指導のための母親指導を実施した。耐性を高めるといってまだ改善点が残されるが、話すことと不安の結びつきを切ること、ストレスを与えないということは、主として集団の母親指導での教師のガイダンス、助言、テキストの輪読、話し合いなどをおして、母親の実行がなされた。その結果、子どもの吃音の改善がかなりなされた。

以上のことから、BruttenとShoemakerの理論から位置づけた母親指導の考え方は、T・K児の事例において、有効であるように思われた。

おわりに、この研究報告をまとめるにあたり御指導いただきました、千葉県特殊教育センターの諸先生方、ならびに千葉市立院内小学校の諸先生、特に資料を提供して下さった梅村正俊先生に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- (1) Van Riper著 田口恒夫訳：ことばの治療：新書館（1967）
- (2) 神山五郎編著：吃音研究ハンドブック：金剛出版（1967）
- (3) 小林重雄著：吃音児：黎明書房（1972）
- (4) Brutten, E. J & Shoemaker, D. J.: The Modification of Stuttering, Prentice-Hall, Inc (1967)
- (5) 日本言語障害児教育研究会 昭和48年研究大会資料集
- (6) 内山喜久雄、高野清純編集：講座心理療法 第2巻、行動療法の理論と技術：日本文化科学社（1973）
- (7) 祐宗省三、青木豊、小林重雄編著：行動療法入門：川島書店（1972）
- (8) 言語臨床研究会：吃音臨床研究（1973）
- (9) 大熊喜代松著：どもりの子の母親教室：日本放送出版協会（1971）
- (10) 大熊喜代松著：新訂 言語障害児のコトバの指導：日本文化科学社（1971）